

書評

Guillermo Bonfil Batalla (comp.), *Utopía y revolución: El Pensamiento político contemporáneo de los indios en América Latina* (México: Editorial Nueva Imagen, 1981), pp. 439.

抑圧された民族集団の解放、復権運動は、世界的規模で展開しつつある。このことは、原住民世界大会の第1回会議が、1975年にカナダで開催され、昨年もオーストラリアで開催されていることから知ることができる。第1回大会では、アメリカ大陸の諸国において「民族の日」(Día de la Raza)とされている「10月12日」(コロンブスの西インド諸島への到来日)を“Día de la Desgracia y Luto International”と呼び改められることが決議されている。

この日以来、アメリカ大陸にインディオが存在し始めたのである。植民地化以前のアメリカ大陸には、インディオという存在はなく、様々な民族集団が存在していたにすぎない。各民族集団の生産様式や社会構成も同質的なものでなく、民族集団の支配従属関係も存在していた。言語・文化に示される多種異質性を含め、各民族集団の間に存在していた非同質性は、インディオ=植民地支配の対象という画一性をもったカテゴリーに解消されてしまった。このインディオは、独立期以降の国民国家モデルにおいては、統合、併合、同化の対象となり、究極的には絶滅をその宿命と定められた存在であった。

アメリカ大陸における民族集団の復権運動の相互交流と連帯のネットワークは、1970年代に着々と拡大していった。その契機のひとつに、1971年に「南米非アンデス地域における民族間摩擦」をテーマとし、南米の森林地帯で民族集団抹殺の危機におかれている諸民族集団の自治・自決権を強く主張した宣言を採択したバルバドス会議がある。民族集団虐殺に対しては、ロベル・ジョランが精力的な反対キャンペーンを展開し、1968年、1970年、1974年の国際アメリカニスト会議などでも激烈な討論が展開されてきた。1977年に開催された第2回バルバドス会議は、アメリカ合州国のオナンダカ(Nación Onandaga)の代

表を含めアメリカ大陸の11ヶ国の原住民の諸組織の代表が参加し、「ラテンアメリカの原住民解放運動」というテーマで、様々な討論が繰りひろげられた。この討論の成果は、Indianidad y descolonización en América Latinaとして、本書と同一シリーズ(Serie Interétnica)の一冊として、1979年に出版されている。(以下『資料集』と略)

本書は、いわば『資料集』の続篇ともいべきものである。編者ボンフィール・バタジャは、シリーズの監修者であり、『資料集』においても、総論ともいべき1章“Las nuevas organizaciones indígenas: Hipótesis para la formación de un modelo analítico”を担当している。また、本書に収録されている種々のテキストは、バルバドス会議に参加した原住民組織や、会議そのものの運営にあたったラテンアメリカ人類学資料センター(メキシコ市)の協力などによって入手したものが大部分である。

編者ボンフィール・バタジャは現在メキシコの国立人類学歴史学歴研究所高等研究センター(CIS-INAH)のディレクターであるが、1968年の「危機」を契機として展開した伝統的人类学やインディヘニスモに対する批判運動の担い手のひとりである。国立人類学歴史学学校の教官なかまとの共著 *De eso que llaman antropología mexicana*(Editorial Nuestro Tiempo, 1970)に所収されている“Del indigenismo de la revolución a la antropología crítica”において、革命以降の国家モデルが認めようとしない「複数民族国家」(nación pluriétnica)という理念を提起し、インディオ概念と民族集団概念の弁別の必要性を強調している。

本書のタイトルと同一の題である序論においても、その立場は堅持されている。5世紀にわたる植民地化という抑圧の歴史を共有することに基盤をもつ「インディオ性」(indianidad)は、インディオの名のもとに含まれる諸民族集団の言語、宇宙観、歴史、文化の特異性にもとづく具体的実在である民族(etnia)の多様性を認知することによってのみ、有効な概念となりうる。

序論においては、所収されたテキストの選択基準がのべられている。すなわち、民族集団内部の個別問題のみを扱ったものでなく、社会全体の変革を視野にいれた政治的性格をもつもので、それが自己をインディオと同定する個人や組織の手によるものであることが基準となっている。いわゆるインディヘニス

タの著作は含まれていない。テキストはⅠ部がインディオ知識人・イデオログの著作、Ⅱ部が、様々のインディオ運動組織の発表した宣言文などとなっている。また序論においては、原住民運動に対するラテンアメリカ各国の対応(暴力、無視、無理解)や、対原住民政策の基本路線の要約がおこなわれている。

第Ⅰ部には、ボリビア、ペルー、グアテマラから2名ずつ、パナマ、ベネズエラ、メキシコから各1名の著作や抜粋が収録されている。前3国はアメリカ大陸でも、インディオ農民人口の多い地域であり、インディオ独自の政党組織さえみられる(ボリビアとペルー)。すなわち、インディオは抑圧された多数派にはかならない。とりわけ、ペルーとボリビアの4名の著作は、タワンティンスヨ(いわゆるインカ)の諸原理の復権を明確に掲げており、復古主義的な土着主義運動の色あいが強く感じられる。そこには強烈な反西欧主義があらわれている。

ボリビアのファウスト・レイナガ(ボリビア・インディオ党創設者)は、アンデス地域のインディオ運動組織のシンボリック的存在であり、本書では、1969年以降の著作からの抜粋が4篇収録されている。そこでは白人—メスチソ社会の操作する同化・統合政策によるボリビア国家建設の虚構性が指摘され、インディオこそコラスユ(ボリビア)の主人公であると断言し、人類絶滅に至る西欧の直線的時間論に対する新大陸の円環論的宇宙論の優位性も強調されている。このような立場は、ペルー・インディオ運動の指導者ギジェルモ・カルネロ・オケとビルヒリオ・ロエルの著作にも共通している。かれらは、アイユウ組織、ミンカあるいはヤナパクィによる相互扶助、平和・調和・誠実・公正を原則とするティンクィ制度などの諸システムを西欧社会の諸制度に対置させ、「第2タワンティンスヨ創設」をプログラムとして掲げている。

一方、ボリビアのラミロ・レイナガは、自らをケチュア・アイマラと規定し、インディオの視点からマルクスの解放思想をインディオ運動により新生化する道を模索しようとしてきた。本書では1972年の *Ideología y raza en América Latina* (La Paz, Ediciones Futuro)からの一部抜粋という形がとられているが、彼の思想の全貌は、ワンカールという筆名で著された *Tawantinsuyu: Cinco siglos de guerra Qheswaymara contra España* (México, Editorial Nueva Imagen, 1981)で知ることができる。かれは、1980年3月クスコで開催された第1

回南米インディオ政治運動会議で、南米インディオ会議の調整委員長に就任している。かれは、チェ・ゲバラの山岳ゲリラ戦敗北を、「インディオの地における白人ゲリラ戦」の限界とし、アンデス地域の解放は、抑圧された絶対多数派のインディオの力によるしかないと主張する。

グアテマラのアントニオ・ポプ・カールと無署名者の論文は、ラディノ(メスチソ)ーインディオという概念のフェティシズム化を扱っている。とりわけ無署名者の“Réquiem por los homenajes a La Raza Maya”は、国家・支配者の側から設定されている「民族の日」、「インディオの日」などの行事などにみられるインディオのフォルクローラ化に対する鋭い分析がなされている。コパン民族祭典は、北米観光客を楽しませ、ラディノを癒し、原住民をだますための抑圧イデオロギーの発露の場にほかならない。また官製の「民族の日」に対して、原住民族集団の侵略に抵抗した歴史を解明していくことの必要性は、ベネズエラのグアヒラ出身のアルカディオ・モンティエルも論じている。彼は「グアヒラ計画」という名で進行している開発戦略は、民族集団に何ら利することのないもので、このような新手の「ラス・カサス」の仮面を曝くことの必要性も説いている。

残る2篇は、1925年以来自治権を保有しているパナマのサン・ブラス諸島のターナ(トウレ)の司祭詩人アイバン・ワグアの『インディオの沈黙から』と題する詩集からの抜粋と、メキシコの全国原住民二重言語職人連盟(ANPIBAC)に属するミステカのフランコ・ガブリエル・エルナンデスの“De la educación indígena tradicional a la educación indígena bilingüe bicultural”と題する論文である。ANPIBACは、1975年以降に制度化されていった全国原住民審議会と並行して組織化された二重言語教師、文化プロモーターの組織体である。その活動方針や目標は第Ⅱ部に所収されている数点の報告で詳しく知ることができるし、簡単な紹介は黒沼ユリ子『メキシコからの手紙』(岩波書店、1980)でもおこなわれている。しかし、「複数民族の対等共存社会」というスローガン自体が、体制のお墨付のものとなってしまった現状では、ANPIBACは新たな原住民エリート層の体制への吸収同化という危険を抱えているといえよう。

第Ⅱ部には40篇のテキストが収録されている。ラテンアメリカを5地区に大別して、各地区におけるインディオ運動の1970年代の動向が、各セクション

ンの冒頭に紹介されている。各民族集団のおかれた状況に対応して、各運動体の活動形態や路線に多くの差異がみられることは否めない。以下簡単にテキストの紹介をおこなう。

1) 南部地域 1974年パラグアイで開催された第1回アメリカ南部域インディオ議会の決議(アルゼンチン、ブラジル、ベネズエラ、ボリビア、パラグアイから代表参加)、1974年メキシコの国際アメリカニスト会議におけるアルゼンチン共和国原住民連合代表のアピールおよび、ピノチエツト軍事独裁政権下における土地収奪攻撃とたたかうマプーチエのアピールが収録されている。マプーチエに関しては『資料集』に所収されているビセンテ・マリケオの“El pueblo mapuche”(pp. 137-99)と併読すると有益であろう。

2) アンデス地域 1973年ラパスで発表された「ティワナク宣言」(アムネステイのラテンアメリカ研究会誌『エル・クラベル』2・4号に邦訳)をはじめ、ボリビアのMIN'KA、トゥパック・カタリ・インディオ運動(MITK)の2組織の文書数点と、ペルーのペルー・インディオ運動の第2タワントィンスヨ創設プログラムなどが収録されている。ボリビアでは、1978年選挙においてMITKのほか「トゥパック・カタリ革命運動」(MNTK)、「トゥパック・カタリ民族運動」(MNTK)の「トゥパック・カタリ派」3政党が独自の大統領候補を立てるなど、農民—インディオ解放運動が高揚し、3党の統一もはかられているので、この点に関するテキストが収録されていればと思われる。また、ペルーでも1979年クスコで第1回諸民族・少数民族集団会議が開催され、アイマラ・トゥパック・カタリ連盟、クスコ・トゥパック・アマル革命連盟、クスコ・プーノ・カハマルカ農民連合をはじめ、アマゾン流域のシピジビオ、アクアルナ、アムエシヤなどの少数民族の連合組織ペルー森林域原住民共同体調整委員会(COCCO-NAEP)なども参加したといわれるが、この会議の資料は入手不能で掲載されていない。

一方、コロンビアのカウカ谷の原住民組織「カウカ谷原住民地域会議」(CRIC)は今世紀初頭のキンティン・ラメに領導された農民斗争の伝統をひきつぎ、自らをインディオ=農民と規定し、極めて精力的活動を展開している。定期誌Unidad Indígenaなども発行しコロンビアの他の地域の原住民運動や大衆運動への連帯活動も活発である。

3) 森林地域 ブラジルの民族集団は、インディオ解放を標榜する全国インディオ機関(FUNAI)の存在にもかかわらず、民族集団抹殺は進行しつつある。本書には、シャバンテ、ボロロ、グアラニなど9つの民族集団の「インディオの日」(4月19日)のメッセージが所収されているほか、ペルーのCOCCONA-EP、ベネズエラ、コロンビアの森林地域の諸組織の連帯要請も収録されている。また、わが国では首狩族ヒバロとして知られているエクアドルのシュアル連盟は、1963年の結成以来、独自の放送局、定期誌(母語と西語)、奨学制度を保有していることが注目に値する。

4) 中米地域 パナマ原住民全国会議第7回会議(1976)の決議、パナマ原住民全国連盟のアピール、および中米・メキシコ・パナマ原住民会議の決議・要請文と、その地域会議のメッセージに加えて、グアテマラのキチューが1978年に創刊した月刊誌Iximの1周年記念論説が収録されている。現在も帝国主義とオリガルキー体制とのたたかいが続いているエルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラスや、サンディニスタ革命の進行するニカラグアにおける原住民集団の運動は、本書から具体的に知ることはできない。ニカラグアのモンボの例にも典型的にみられるように、グアテマラの解放運動の過程において、原住民集団や農民は大量虐殺(パンリス、スペイン大使館、ネバイなど)という独裁体制の集中的弾圧をうけている。解放諸組織の内部においても、グアテマラの多民族性の問題と民族的抑圧の問題が議論されているという。

5) メキシコ 本書に収録されているのは、過去3回(1975, 77, 79)の全国原住民会議の決議文、ANPIBACの活動方針、宣言文のほか、ワステカ地方の原住民=農民の、大土地所有者、政治家、軍隊による暴力弾圧に対するアピール、(1978年)とミチョアカン州の原住民族集団プレペチャ(一般にはクラスコとして知られる)の自己の共同体、住民、母言、習慣を防衛する旨の宣言が所収されている。

以上のテキストの他にバルバドス第2宣言の全文と、ラテンアメリカ人類学資料センターによるラテンアメリカの409の原住民族集団の人口推計が掲載されている。一般に言語を基準にした調査は、年令5才以下を除外するという手続によって意図的な統計的民族集団抹殺をおこなっているため、常に原住民人口を過少評価してきたことは注意しておかねばならない。この推計では約3千

万人であり、全米インディヘニスタ協会(III)の推計 2850 万人(1978)と大差ない。

多様な民族集団の運動体の政治思想の基底には、反西欧志向＝反帝国主義、汎インディオ性の主張、自己の歴史、文化の復権という共通性がみられる。しかし、その展望は、超復古主義、改良主義、インディオ社会主義、多元的社会主義など多岐にわたっている。それゆえ階級と民族集団の問題に対する態度も異なっている。ただ、具体的な要求事項には大まかな共通性がみられる。土地の防衛と獲得、民族的、文化的特性の認知、国家に対する平等な参加権、暴力的弾圧への糾弾、「家族計画」押しつけに対する反対、インディオ文化のフォルクロール化反対などは、多くの宣言にみることができる。

いずれにせよ、ラテンアメリカの原住民は征服されたのではなく、侵略されているのである。この認識を共有することが、インディオ運動を理解することに不可欠であるといえよう。

(神戸市外国語大学, 小林致広)